

「復活論争」

2014年10月25日

マルコによる福音書12章18節～27節。復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

サドカイ派の人々は貴族階級に属し、ローマ支配を甘受する現実容認の立場であった。彼らは見えない復活や天使を信じなかった。その彼らが主イエスに復活の愚かしさを問いかける論争を仕掛けてきた。7人の男兄弟の長男が妻を迎えたが、跡継ぎを残さないで死んだ。その場合、弟が兄妻と結婚し、兄の跡継ぎをもうけるレビレート婚というしきたりがあった。弟たちは、兄嫁を妻としたが、跡継ぎをもうけずに次々に死に、妻だけが残り、最後にその妻も死んだ。復活した時、7人の兄弟と結婚した彼女は誰の妻になるのか。あり得ない話ではあるが、復活は、このような愚かな信仰であると言った訳である。

主イエスは、聖書も神の力も知らず、思い違いをしていると指摘し、三つのことを語っている。① 死者の中から復活した時は、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになる。これを聞いたある女性が「天国に行って、もう一度夫と結婚したいわ」と言った。よほど、夫が好きだったようだ。カール・バルトは、天国で会いたい人と会えるが、会いたくない人にも会うことになると言ったそうだが、天使になれば、会いたくない人がなくなるのではないか。② 死者の復活については、モーセが燃える柴の中から聞いた「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という神の言葉に表されている。アブラハム、イサク、ヤコブはモーセの何百年も前に死んでいるが、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という言葉で、彼らは復活の命に与り、生きていると言っている。ルカ福音書16章に、アブラハムが天国の宴席に迎えられている姿を描いている。③ 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。人間は時間の中に生きているので、生と死を区別して考えるが、神は永遠に生きている方なので、生も死を超えている。神の前では、人は皆、生きる者とされている。生きている者の神とは、生死を超えて生かしてくださる神と理解していいのではないか。見えるものだけに固執するサドカイ派の人々に永遠の神、その神に基づく復活の命を語って、論破された。

死後のことは誰にも分からない。主イエスの言葉を信じるか信じないかである。信じる者には死は恐怖や無に帰すことではなく、神とまみえ、親しい人々と再会する希望となる。信じたほうが、死をも望みとして、今を楽しく生きることができよう。